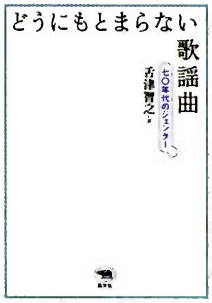

アメリカ音楽史

–ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップポップまで–

大和田俊之著　講談社　2011（講談社選書メチエ）

どうにもとまらない歌謡曲 –七〇年代のジェンダー–

舌津智之著　晶文社　2002

法学部准教授　上原 正博

新入生の皆さん、専修大学へようこそ。ようやく新しい学校が始まりましたね。

在学生の皆さん、お帰りなさい。とうとう始まってしまいました (>_<)。

新入生の皆さんにしても在学生の皆さんにしても、不安と期待で胸がいっぱいになっていることと思います。新しい環境に身を置くことになったとき、それまでの環境で築いてきた適応性や習慣が通じるのかどうか不安になることがあるでしょうし、適応していくために習慣を変えたりすることに抵抗を感じたり、新しい自分を発見できるかもしれないという期待をもつこともあるでしょう。皆、サバイバルに必死なのです。

新入生の皆さん、先輩面した新２年生だって神田キャンパスでの生活は初めてで、同じような期待と不安を抱えているはずです（これは法学部の学生だけでしたね）。新3年生もゼミの始まる学生は環境が異なるでしょうし、就職活動準備に入らなくてはならないという雰囲気に押し潰されそうな学生もいるでしょう。新４年生は卒業学年ですから、言わずもがなです。生田でも神田でもどこでも皆サバイバルに必死なのです。

自分を変えることへの期待、自分が変えられていくことへの不安。生き残るためにアイデンティティを変えようとすること、アイデンティティを変えられることに自分というものが生き残ってゆけるのかどうか感じる心のゆらぎ。

これらもまた文化をつくってゆくプロセスだということに思い至らせてくれるのが、ここに紹介する書籍です。アメリカ大衆音楽の様々なジャンルが歴史的に（あるいは政治的力学の結果として）描写されてきたことを解説しつつ、その背後に「擬装」（自分でないものへの同定・アイデンティフィケーション）という行為があることを浮き彫りにしようとする『アメリカ音楽史』に、わたしは自分らしさへの希求(必死なサバイバル)を読みこんでいます。また、社会的に構築された性差であるジェンダーを軸に、1970年代の「歌謡曲」の 歌詞と歌唱に焦点をあて、擬装のなかにジェンダー力学を見いだすのが『どうにもとまらない歌謡曲』です。たとえば、男性作詞家が女性の気持ちを謳い、それを男性歌手が裏声などを用いつつ唄いあげる。面白いと思いませんか。ちなみに、Ｊポップというジャンルの誕生（発見？）は上記『アメリカ音楽史』のジャンル論の政治的力学の一例といえます。

とまれ、「なんちゃって制服」とかで擬装を実践してきた君たちだもの、共感を持ちつつ読むことができると思いますし、自分を変えることに期待を抱く人だけでなく、自分が変えられていくことに不安を感じている人も、その変化もまた文化なのだということに気づくことでしょう。お互いサバイバルにがんばりましょう。